

公益財団法人 松園尚己記念財団

My graduation 2022

## Y.O

大学教員

九州大学 大学院 システム生命科学府卒

春は過ぎて少し暑くも感じる頃、季節外れの博士号を取得しました。

私は天才ではありません。非天才の学生生活では、気になった実験や面白そうな実験を朝から晩まで試行錯誤しているばかりで、殆ど誰かの役に立つような事は出来ませんでした。研究者とは何だろうか、こういう事を考えるようになったのは、博士号取得を目前にした最近の事です。生物学の若輩者からすると、即ち役に立つ、所謂「応用」研究や、疾患に直結する研究課題は、インパクトファクターの高い商業誌に掲載され、従って大きな研究費を掻っ攫っていく見事な循環が仕上がっているように見えます。さらに、そのような強い研究者にまでのし上がってしまうと、高い所から実験室に降りて来て、実際に自分で細胞を観察したり、朝方まで残ってやっとデータを取ったり、なんて事をしている時間は皆無です。毎日の重鎮会議や講義、事務作業に追われる研究者、こういう研究道の先輩のようになれるだろうか、いや、正直なところ、なりたくないのです。このような研究者は果たして新しい発見をすることができるだろうか、執筆論文は過去の栄光の増版にしかならないのではないだろうか。これらは単に嫉みかもしれません。ただ、自分の手で、成る程、成る程と進めることが面白いと思うのです。今後の研究生生活を考えたときに、研究費の為の研究にどうして熱を持って向き合うことができるでしょうか。国際紙の総説において Open Question として提示されている大きな疑問に立ち向かっている研究者は、国内学会には殆どいないように感じます。解るかどうかわからない研究に挑む体力は雑務に消費され、科学者としての好奇心の炎は鎮火し、研究費獲得に燃える研究者にはなりたくありません。残念ながら、興味に基づく基礎研究は、現在の日本ではあまり評価されません。他者の評価など気にしなくても良いというのが本音ですが、評価が無ければ研究費が獲得できません。そもそも基礎研究だけでは研究者としてやっていけないのかもしれない。どの研究が役に立つ研究に化けるか、誰にも分かりませんが、「何それ、何の役に立つの？」よりも、「何それ、面白そう！」と言ってくれる国に人材が流れるのは必然に思われます。

視野は広く持たなければならぬ、自分の今見ている世界はほんの一部に過ぎないのだと、常々自分に言い聞かせています。今後も面白いことに貪欲な研究者でありたいです。